

(報告書)

## 近世～近代前期の異類合戦物における嗜好品の受容

伊藤 慎吾 (國學院大學栃木短期大学・日本文化学科)

### 1. 研究目的

外国の文化に比して、日本文化が歴史的にも、現代においても人間以外のものをキャラクター化することに特色がある。

必ずしも擬人化されるものではなく、妖怪や神の化身として描かれるものも少なくない。

中世後期になると、そうした人間以外のキャラクター（異類）同士の合戦物語が開拓されていく。その背景として、『平家物語』を主とする軍記物語の趣向が異類の文芸に取り入れられたことが大きい<sup>1)</sup>。その代表的な作品として、『十二類絵巻』や『鴉鷺合戦物語』『精進魚類物語』がある。それらはその後の文芸に影響を与えることとなった。近世には、物語・語り物文芸における一つの潮流として展開し、物語・語り物文芸だけでなく、歌謡（語り歌）・謡曲（謡曲形式の戯文）・絵画（特に浮世絵）等の創作にも波及した<sup>2)</sup>。取り分け、赤本以来の草双紙でも瓦版物などと呼ばれる戯作（大寄席噺尻馬シリーズ等）では、異類合戦物が好まれ、数々の新作が生まれた。その一方で、出版を目的としない創作物の中にも異類合戦物は多様に展開し、近世期の地方文芸の一ジャンルとして見做すことができるだろう。また、版本を基にしながら、単に転写されるにとどまらず、大幅に加筆修正された異本も少なくない。更には、それらを台本として、祭礼における神楽（里神楽）として舞台上で演じられることもあった（岩手県一関市の南部神楽等）。近代に至っても、なお、娯楽読み物や寄席の色物芸、地方における語り物文芸（滑稽物やチャリ物）として昭和戦後期まで命脈を保った。

近世期の異類合戦物は、題材として、鳥獣虫魚・草木は言うまでもなく、食物・薬・家財道具・衣服など様々なものが見られる<sup>3)</sup>。その中で、〈酒と茶〉〈餅と酒〉〈精進と魚介類〉は中世以来の対立軸であり、異類合戦物を代表するものといえる。近世期は、それらをコンセプトとして、各地の酒・茶・餅（餅菓子）・料理の名が明記されるようになる。ここに、近世期の新しい嗜好品として、煙草の銘も加わり、〈酒と煙草〉という対立軸も成立する。

その中で、『酒茶論』『酒餅論』『酒飯論』など、近世前期を代表し、戦前から知られた作品については、すでにいくつかの作品論が試みられている。中でも餅と酒については、すでに『「お菓子とお酒の大合戦」展 第六十一回虎屋文庫資料展』の解説や畑有紀氏による詳細な分析・研究<sup>4)</sup>が行われている（なお、英語論文としては2020年、Elena Follador氏によるお伽草子異類合戦物の論文が管見では嚆矢である<sup>5)</sup>）。しかしながら、それは特定の作品を対象にしたものであり、全体を俯瞰すれば、まだ一部に過ぎない。とりわけ、『餅酒大合戦』『魚貝英記餅酒合戦』といったいわゆる瓦版物は幾度も改版されていながら、諸本の関係性も解明されていない。

そこで、本研究では近世の異類合戦物の特徴である身近な嗜好品が擬人化して登場する作品を取り上げる。具体的には1. 『酒煙草合戦』の基礎的研究、2. 餅酒合戦・餅合戦物の系統的研

究を、それらの原本の調査を中心に行い、異類合戦物の文芸史における嗜好品の受容実態を把握する。

## 2. 研究方法

異類合戦物における嗜好品の受容について明らかにするためには、テキスト分析は必須である。未調査・未翻刻資料が多いために、まず伝本を調査する必要がある。そこで本研究は2つに大別される。1つは『酒煙草合戦』伝本の研究、もう1つは餅酒合戦・餅合戦の系譜の研究である。

### 1 『酒煙草合戦』の諸本調査

『酒煙草合戦』には下記の3種の伝本が確認される。たばこと塩の博物館所蔵の2種(②③)の伝本はすでに影印・翻刻版が刊行されている。

①徳田和夫氏所蔵 近世後期写本

②③たばこと塩の博物館所蔵 近世後期写本2種(当館資料集掲載)

その他、伝本の記録調査(諸文献、目録類等からの発掘)

### 2 餅酒合戦・餅合戦物の諸本調査

餅酒合戦物、もしくは餅合戦物と一括し得る作品群については版本が散見されることもあり、これまで紹介や言及されることもあった。しかし、写本となると、ほぼ未調査のものである。そこで、下記の6種の原本調査を実施し、その他、関連資料を収集することにした。

①『〈名物名代〉餅酒騒動はなし』徳田和夫氏所蔵

②『下戸上戸合戦』徳田和夫氏所蔵

③『酒餅軍記』津市立図書館所蔵

④『餅酒後日太平記』上田市立図書館所蔵

⑤『酒と餅との水かけ論』金沢市立図書館所蔵

⑥『餅合戦状』徳田和夫氏所蔵

## 3. 研究成果

### 1 『酒煙草合戦』の諸本調査

①徳田和夫氏所蔵・写1冊

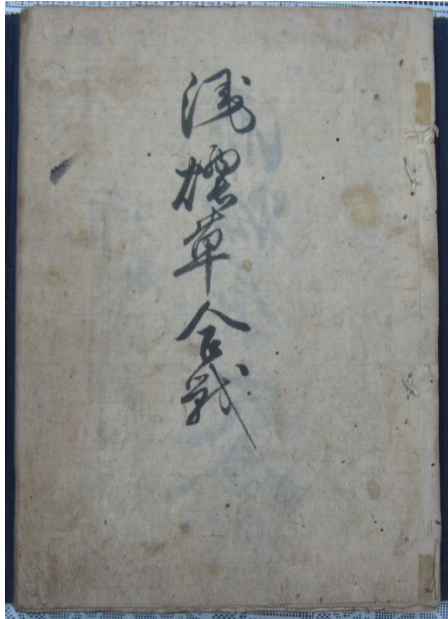


図1 表紙



図2 前見返・巻首

書型 仮綴

寸法 たて 12.0cm×よこ 16.2cm

料紙 楮紙

外題 酒煙草合戦（中央・直・墨書）

内題 酒煙草大合戦（前見返・中央）

酒煙草合戦（本文冒頭）

丁数 17丁

「酒煙草合戦」（1 オ～14 オ）

「酒得失之論」（15 オ～17 ウ）

行数 9行

本文 漢字平仮名交り文。振り仮名は片仮名。

奥書 「酒煙草合戦」本文末尾（14 ウ）に次のようにある。

阿部氏

安永四年<sup>乙未</sup>卯月吉日写之重往〔花押〕

また、17丁ウラに、後表紙によって隠されるかたちで次のような奥書がある。

丁酉四月下旬四日小林氏方写<sup>シ</sup>取<sup>ル</sup>

備考

1, 上記2つの奥書から、「安永四年乙未」はこれを書写した記録ではなく、親本である小林氏蔵本に付いていた奥書であること、「丁酉」が「酒得失之論」を加えた本書の書写奥書であることが考えられる。そして、前見返に「片桐氏朝作用」とあることから推察するに、安永6年（1777）に片桐朝作なるものが小林氏から安永4年の奥書を持つ『酒煙草合戦』を借り、これを転写し、さらに「酒得失之論」を付録として加え、作成した。これが徳田本ということに

なるだろう。

- 2, 当該伝本については『國學院大學栃木短期大学紀要』第 57 号（2023 年 3 月）に、「徳田和夫氏所蔵『酒煙草合戦』解題と翻刻」と題して翻刻紹介を行った。

②たばこと塩の博物館所蔵・写 1 冊（略称：A 本）

寸法 たて 23.8cm×よこ 17.0cm

外題 酒煙草合戦（中央・直・墨書）

内題 酒煙草合戦（本文冒頭）

丁数 20 丁

行数 9 行

本文 漢字平がな交り文。振りがなは片かな。

奥書 本文末尾（20 才）に次のようにある。

阿部氏

安政四<sub>巳</sub>年二月写之者也

備考 『たばこと塩の博物館 所蔵資料翻刻集』第 3 集（1998 年）に影印・翻刻掲載。

③たばこと塩の博物館所蔵・写 1 冊（略称：B 本）

寸法 たて 23.2cm×よこ 17.2cm

外題 酒煙草合戦 完（左肩・直・墨書）

内題 酒煙草の合戦（本文巻頭）

丁数 8 丁

行数 10 行

本文 漢字平がな交り文。振りがななし。

奥書 巻末に次の奥書がある。

天保六<sub>乙</sub>未年

十月吉日

肥田野平作主

また、後表紙に次の奥書がある。

米倉村

藤原信詮主

備考

- 1, 『たばこと塩の博物館 所蔵資料翻刻集』第 4 集（2000 年）に影印・翻刻掲載。
- 2, 内容は徳田本、A 本と大幅に異なる。『資料集』解説（無記名）から梗概を引用する。

酒の大將味醂王諸白は、近年たばこに世間の人気が集まっている鬱憤を晴らそうと軍勢を集めた。たばこも負けじと味方を集め、両軍杉の林でにらみ合いになる。互いに相手の悪口と自己弁護を繰り返し、戦がはじまった。一進一退のぶつかり合いの中、お茶の仲裁が

入り、ようやく事が止む。(p.5)

3、奥書に見える米倉村の肥田野家は新発田藩（現・新潟県新発田市米倉）内の大庄屋である。2023年3月5日、当地に調査に入ったところ、肥田野平作の子孫にあたる肥田野順一氏（平作の弟清信の曾孫）に出会った。詳細は省くが、順一氏及び東北民藝館館長富澤信明氏（血縁関係はないものの肥田野家本家を受け継ぐ）によると、奥書に見える平作は、その後代々襲名する才之丈（図3）の初代とのことである。酒や煙草の生産や流通に関わっている層がこのような異類合戦物の写本を作り、また読んで楽しんでいた可能性を推測させる。

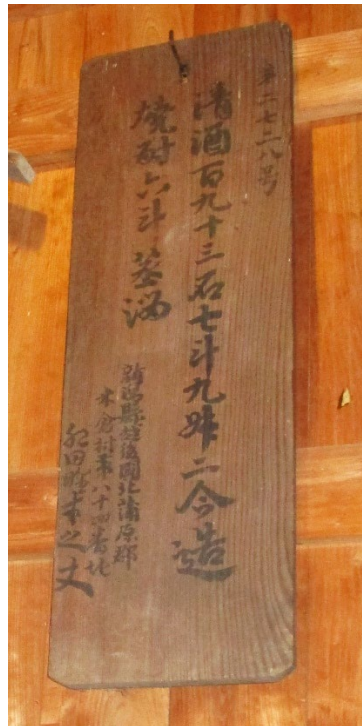


図3 「肥田野才之丈」の名が記されている酒造の木札（東北民藝館所蔵）

④蓬左文庫所蔵『豆腐鮎酒菘蓉論貧病薬』所収「酒煙草論」

①～③のほか、新たに見出したものがあるので、④として追加する。

名古屋市の蓬左文庫に続学舎叢書（寛延4年〈1751〉写）の1冊として『豆腐鮎酒菘蓉論貧病薬』という写本がある。その中に「酒煙草論」という小編が収録されている。まだ本文を検証していないが、単なる論争に終始するのではなく、擬人化した酒と煙草の口論に始まり、ついには合戦に及ぶが最後は和睦に至るといふ、異類合戦物の典型的な構成をとっている。酒の大將は備前酒、煙草の大將は服部玄古で、上記①②③とは異なり、越後とは無関係の作品である。擬人名は服部玄古以外用いられていない。下記の酒・煙草がキャラクター化されている。

【酒】備前酒・桑酒・練酒・玉子酒・霰酒・養老酒・延命酒・桂泉酒・味醂酒・白酒・泡盛・焼酎・梅酒・<sup>さけ</sup>菊花酒・桃花酒・忍冬酒・甘酒・諸白・片白・並酒・霰酒

【煙草】服部・小山田・き坂・浪田・小松・竜王



なお、管見に入った記録類からは上記の伝本以外の存在は確認されなかった。しかし、徳田本に付録として収録される「酒得失之論」があることから知られるように、異類合戦物の周辺には、対象となる嗜好品に関する得失論が独立して存在することが分かった。異類合戦物の物語上の展開として、両者の得失を主とする論争から合戦へと進むことが多い。あるいは合戦における名乗りの場面で両勢力から進み出たキャラクターがそれぞれの得失を論じることもある。これらの得失論は典型的なものが多く、たとえば酒であれば『酒餅論』を原拠として作られたものもあろうかと考えられる。しかし、そうではなく、こうした物語のかたちを採らない得失論が取り入れて合戦譚が作られる可能性も否定できないわけである。「酒得失之論」のほか、恐らく随筆や備忘録の類に書き留められることもあったかと思われる。今後、こうした資料に注意していく必要があるだろう。

## 2 餅酒合戦・餅合戦物の諸本調査

未調査作品として、下記の諸本の調査を行った。

- ①『〈名物名代〉餅酒騒動はなし』徳田和夫氏所蔵・写1冊

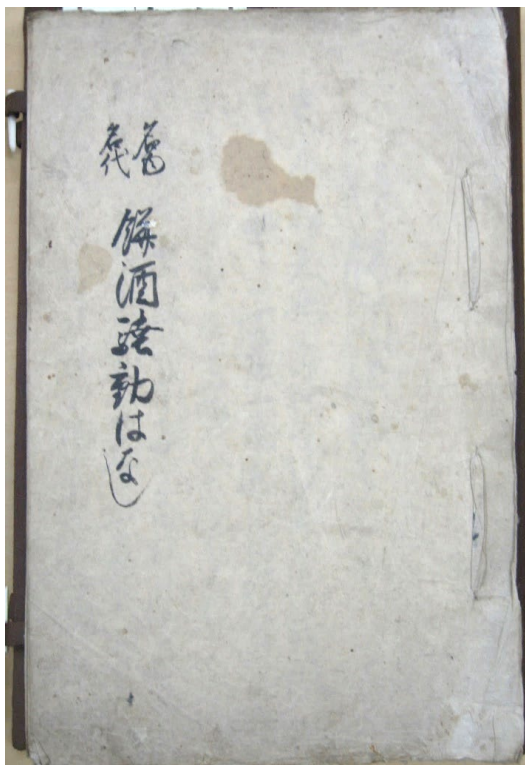


図4 表紙

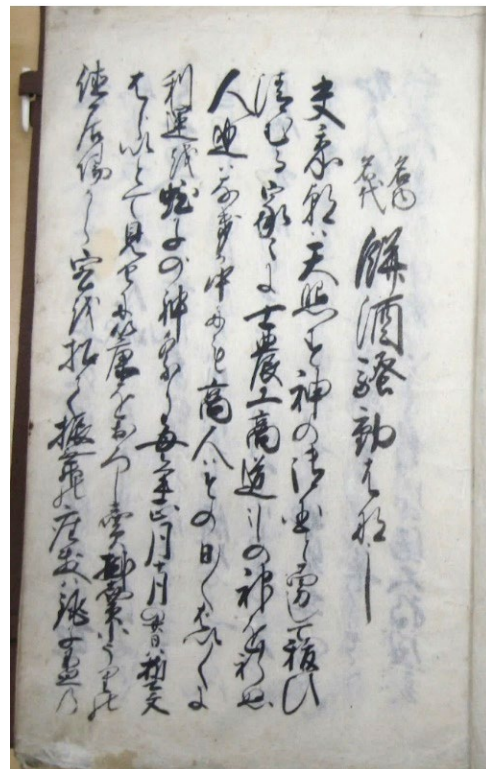


図5 卷首

- 書型 仮綴  
 寸法 たて 24.5 cm × よこ 16.3 cm  
 料紙 楮紙 (本文・表紙共)  
 外題 〈名物名代〉餅酒騒動はなし (直・左肩・墨書)

内 題 〈名物名代〉餅酒騒動はなし（巻首）

丁 数 14丁

行 数 8行

本 文 漢字平仮名交り文。濁点僅少。

備考 本書については、『学習院女子大学紀要』第25号（2023年3月）に「徳田和夫氏所蔵『〈名物名代〉餅酒騒動はなし』解題と翻刻」と題して翻刻紹介を行った。

②『下戸上戸合戦』徳田和夫氏所蔵・写1冊

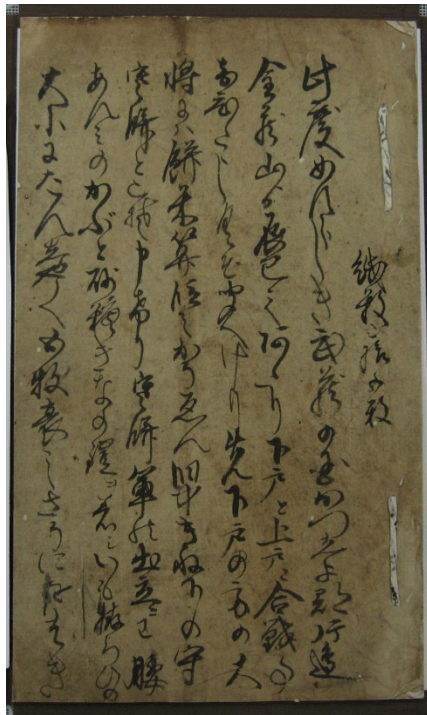


図6 巻頭

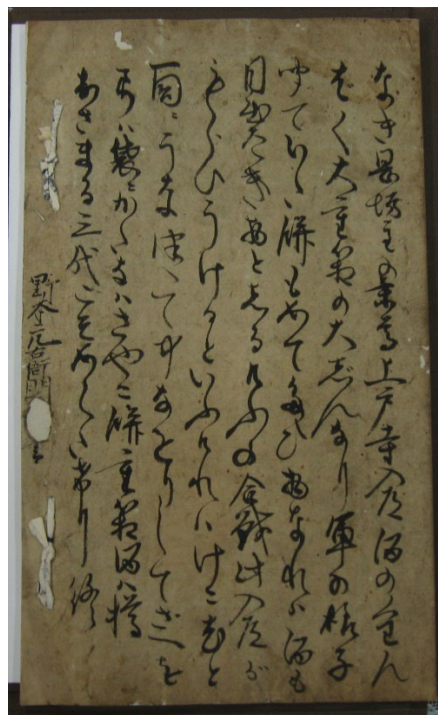


図7 巻末

書型 仮綴

寸法 たて25.0cm×よこ14.7cm

料紙 楮紙

外題 なし

内題 なし

丁数 7丁

行数 8行

本文 漢字平仮名交り文

奥書 本文末尾に次のようにある（図7）。

野本元右衛門欠書

備考

1、書名は帙題に従う。仮題。

2, 冒頭 1 行目に次の書入れがある (図 6)。

紙数貳拾五枚

紙数 25 枚というのは本書と合わない。もともと他の本と合綴していたのかもしれない。

3, 次の餅・酒がキャラクターとして登場する。

【餅】寒餅 (下戸方の大将)・餅米算位 (寒餅の先祖)・若餅・日かん団子・草餅・柏餅・土用餅・力餅・白玉餅・水餅・焼饅頭・かた餅・鹿子餅・月見の団子・新米餅・十日夜の餅・猪子の大福餅・帯解餅・鍋かり餅・かおたり餅・壺文団子・安部川餅 (駿河)・幾代餅 (江戸 両国)・鶯餅・砂糖餅・鶉餅・大仏餅・今坂餅・葛餅・花餅・あんころ餅・むねあけ餅・丸雪餅・豆餅・柿餅・白子餅・栢雑煮・鴨雑煮・蒨餅・栗餅・ばんたい餅・唐土餅

【酒】泡盛 (上戸方の大将 薩摩)・満願寺・丸雪酒 (江戸 隅田川)・菊酒 (加賀)・七つ梅・下戸だまし (能登 七尾)・初桜 (越後)・夏、小夏の鬼ごろし・会津の諸白・伊達の木酒の水いらず・仙台龍の薄濁り・磐城酒 (相馬)・水戸酒 (常陸)・佐原酒 (下総)・あわの宮 (下野)・桜川 (下野 大津屋)・末広 (下野 しま屋)・木諸白 (味醂亭)・白酒・味噌酒・屠蘇酒・生麴酒・とろろ酒・生姜酒・南蛮酒・焼玉子酒・古酒・新酒・どぶろく・四斗樽

4, 内容の検討は今後の課題とする。

③『酒餅軍記』 津市立図書館所蔵・写 1 冊

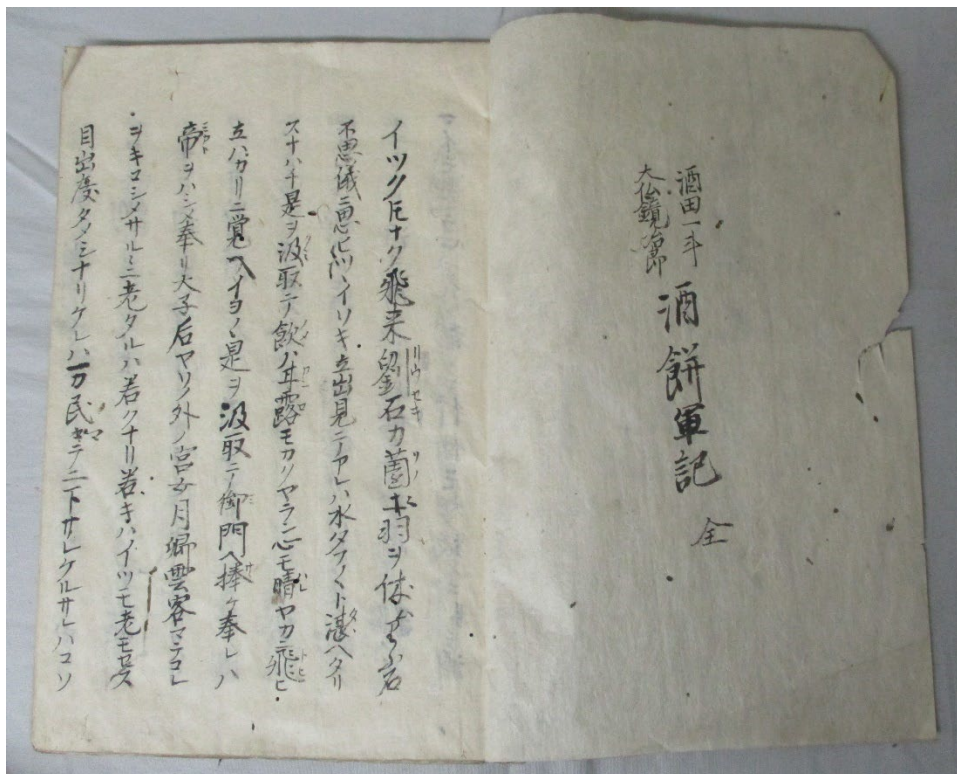


図 8 巻頭

書型 四ツ目袋綴

寸法 たて 24.1cm×よこ 16.8cm



料紙 楮紙

外題 〈酒田一斗／大仏鏡治郎〉酒餅軍記 全（左肩・直・墨書）

内題 〈酒田一斗／大仏鏡治郎〉酒餅軍記 全（前見返・中央）

尾題 酒餅軍記終

丁数 13丁

行数 8行

本文 漢字片仮名交り文。振り仮名も片仮名。「楽鴈（落雁）」「武道酒（葡萄酒）」「人冬酒（忍冬酒）」など当て字が目立つ。

奥書 卷末にあり。

明和四年<sup>亥</sup>ノ仲冬写之

稻垣

備考

1, 物語の冒頭は、劉石の故事の半ばから始まる。本文料紙第1丁表の巻頭から記されているので整った体裁だが、恐らく親本が既に冒頭部分を欠損していたものと思われる。酒方の何者が語っているのかも不明だが、題名角書から、酒田一斗と推察される。

2, あらすじは次の通り。

酒方（酒田の一斗か）が酒の徳と餅の失を説き、ついで餅方の総大将大仏鏡の次郎（治郎）が餅の徳、酒の失を説いて反論する。その後、餅の軍勢が勢揃いし、干菓子・水菓子がこれに加勢する。これを知った酒も軍勢を揃え、肴・鳥・精進肴がこれに加勢する。両軍勢は合戦に及ぶも、諸食の大将飯の判官たねもとが仲裁に入り、和睦に至る。

3, キャラクターとして登場する酒と菓子（餅菓子・干菓子）は以下の通りである（登場順）。

【酒】南都諸白・若狭小浜の諸白・泡盛・琉球酒・羽片の練酒・清水酒（和泉富田）・江川（伊豆）・菊酒（伊豆）・葡萄酒・忍冬酒・味醂酒・焼酎・長君酒・薬酒<sup>くすり</sup>

【菓子】鏡餅（大仏鏡の次郎）・安倍川の砂糖餅・胡麻餅・桑餅・鯨餅・牡丹餅・店屋<sup>てんや</sup>のさつさ餅・新坂（日坂か）の蕨餅・猪俣の金平糖・桜飴・求肥飴・道明寺・砂糖煎餅・砂糖大豆・砂糖櫃・落雁

伊豆や駿河、伊勢といった中部地方やその周辺の酒・菓子の擬人化が散見される点に特色がある。それ以外にも、三河のゴウナ、小田原の鯉のたたき、駿河の<sup>さがら</sup>;相良布<sup>め</sup>（アラメ、もしくはカジメ）など、海産物にもその傾向は見える。

④『(新板) 餅酒後日太平記』 上田市立図書館所蔵・刊1冊



図9 表紙

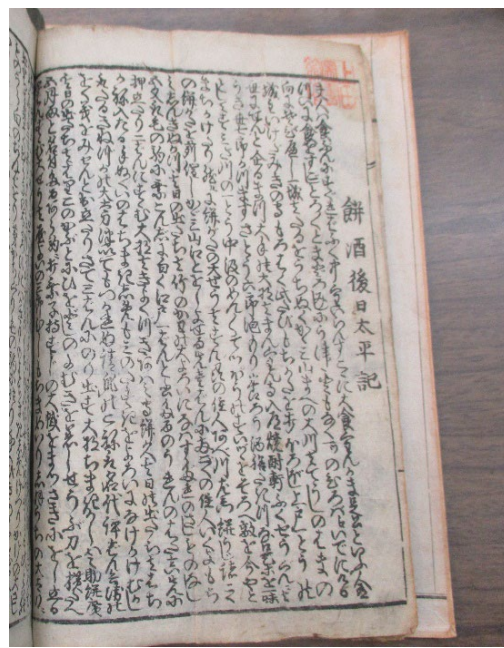


図10 巻頭

書型 諸書と合綴しているため、元の書型は不明。

寸法 たて 22.5cm×よこ約 15.5cm ※合綴のため、横幅不明確。

表紙 本文共紙

外題 「(新/板) <sup>もち さけごにちたいへいき</sup>餅酒後日太平記」(双边・摺外題・中央)

内題 餅酒後日太平記(本文冒頭)

柱刻 丁付(「一」「二」「三」)

匡郭 四周单边。たて 19.8cm×よこ 13.5cm

丁数 3丁

行数 20行

本文 漢字平仮名交り文。

刊記 卷末にあり。

としま町

さのや長次郎板

備考

1, あらすじは次の通り。

大食かにかま足公がまどろむと、酒と餅が合戦をしようとする状況が眼前に現れる。酒方は鏡山の城で戦の準備をし、そこへ餅方の軍勢が発向する。さらに干菓子が加勢する。餅方が銚子の川を渡りかねていたところ、白玉三郎の力で渡ることができ、さらに鏡山の難所を搔餅蔵人が先導し、城にたどり着く。合戦が始まり、両勢奮闘する中、食物の総大将米の冠者出来吉が現れ、和睦に至り、大食かンは夢から覚める。

2, 物語のプロットや登場キャラクターから、『太平記餅酒合戦』及び『餅酒大合戦』と関係があ

ることは明らかである。この 2 作品は 19 世紀前期から中期にかけて成ったと思われるものであるが、本書はおそらくこれを夢オチの設定にて改作したものではないかと思われる。後考に譲る。

3, 擬人化されたキャラクターは次の通り。

【酒】池田みきの守諸白（総大将 池田諸白）・満願寺入道焼酎軒・うき世七郎かずます・さとう六郎泡もり・養老酒膳たきつな・山川四郎酒俊（駿河）・梅酒次郎・菊酒三郎・九年酒左衛門・四方奈良之介瀧水・味噌吉仲（瀧水の先祖）・豊島弥五郎白酒・あつ井の源吾甘酒（「三国一」）・留粕蔵人・かん酒与五郎・あついかん助・ひやのどぶ六・したみの味ない・内田左衛門広見せ

【餅・干菓子】あべ川左衛門餅うじ・幾代餅みしんきぬかつ・極月あはの守餅久・ちまき柏之助餅広・弥生の三郎菱餅・松餅つらき・小麦のすけそふ餡吉（江戸 麴町）・うきふしんこ・白玉三郎・搔き餅蔵人・水餅五郎・鳥飼饅頭良腰・さとう団五郎景勝・おはぎのぼた蔵・鈴木羊羹・最中の煎餅・今坂ちょうはん・かすてら十内

⑤『酒と餅との水かけ論』 金沢市立図書館所蔵・写 1 冊

書型 四ツ目袋綴。

こげ茶色紙表紙（後補）。元は本文と共紙の表紙であったと思われる。

寸法 たて 23.5cm×よこ 16.7cm

料紙 楮紙

外題 水懸論（中央・簽・墨書）

表紙の裏打ちとなっている料紙に

酒餅論

盛口（付箋で見えず）

という墨書がある。

内題 酒と餅との水かけ論（本文冒頭）

丁数 4 丁

行数 10 行

本文 漢字漢字仮名交り文。濁点なし。朱筆の句点を付す。

奥書 後見返にあり。

天保十三<sup>壬</sup>寅歳

孟春写之

藤本氏 [印]

備考 酒のそこぬけと餅の搗き屋による歌の掛け合いから成る。仮名草子『酒餅論』と直接関係ないようである。小鼓を用いた謡のために創作したものかと思われる。とすれば、餅酒の論争の文化的な広がり的一面を示す資料として注意すべきだろう。

⑥『餅合戦状』徳田和夫氏所蔵・写1冊

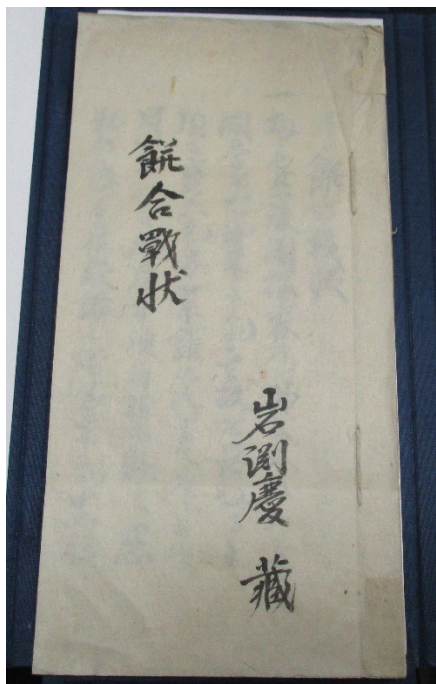


図 11 表紙

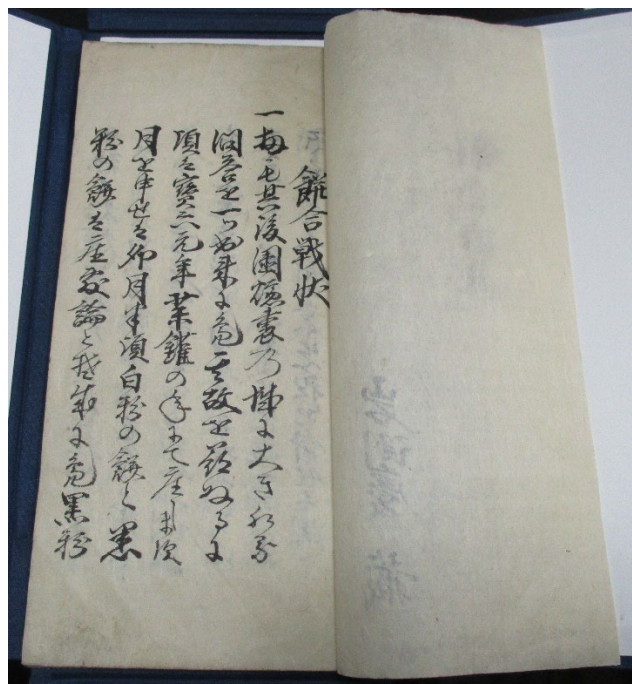


図 12 卷頭

書型 仮綴 共紙表紙  
寸法 たて 26.8cm×よこ 13.4cm  
料紙 楮紙  
外題 餅合戦状（左肩・直・墨書）  
内題 餅合戦状（本文冒頭）  
尾題 餅合戦状終  
丁数 6丁  
行数 6行  
本文 漢字漢字仮名交り文。濁点なし。  
奥書 後表紙中央にあり。

于時嘉永六癸丑年

正月上旬

備考

1, 前表紙右下に旧蔵者の墨書書入れがある。

岩淵慶蔵

素性については未勘。

2, 内容は奥浄瑠璃「餅合戦（黒白餅合戦）」である。「餅合戦」は口頭伝承されてきたものであるが、これを筆録したものが幾つか知られている。『伝承文学研究』第6号（1964年）に、昭和初期に語りを踏まえて推敲したテキストが翻刻掲載されている。他に昭和の戦前・戦後



期に語りの聞き書きを文字起こししたものが幾つか紹介されている<sup>6)</sup>。また、南部神楽の一つである岩手県一関市猪岡の神楽の狂言の台本『万狂言本』にも収録されている<sup>7)</sup>。これは明治期の写本である。いずれにしろ、「餅合戦」の完全な本文は近代以降のものばかりであった。ここに幕末とはいえ、嘉永6年(1853年)の奥書をもつ写本が出てきたことは驚きである。内容の検討は今後の課題としたい。

その他、『飲食太平楽記』(三原市立中央図書館所蔵)については、国文学研究資料館のマイクロフィルム資料で確認するにとどめた。また、盲僧琵琶の滑稽物台本類をかつて所蔵していた伝正院(福岡県福岡市)の訪問についても、助成申請時に予定していたが、すでに第二次大戦時の空襲により焼失していることから確実な成果が期待できず、一方、『酒煙草合戦』の調査研究の中で、新潟県への調査の必要が出、これを優先すべきだと判断したことから、今回は見送った。

最後に、近代の文献では明治大正期に戯文のアンソロジーが複数編集・刊行されており、その中に収録されることがあった。確認できたものを以下に掲げる。

- ・ 漆山萩月庵編『滑稽妙文集』(明治32年〈1899〉) 「風流餅酒論」
- ・ 松村松濤編『あやにしき 滑稽文学』(明治38年〈1905〉) 「風流餅酒論」
- ・ 中川愛氷編『滑稽妙文集』(明治40年〈1907〉) 「餅酒大合戦」
- ・ 十八公堂主人編『滑稽珍文』(大正15年〈1926〉) 「餅酒大合戦」
- ・ 文芸資料研究会編『変態十二史』附録第1巻(昭和2年〈1927〉) 「餅酒大合戦」

このように、近代以降は物語としてではなく、戯文として捉えられている。これらは原本を翻刻したものもあるだろうが、先行する活字本を流用した可能性も否定できない。また、娯楽雑誌の類にも翻刻されている可能性がある。これら明治大正期の娯楽読み物や雑誌類の調査はこれからの課題としたい。なお、『酒餅論』の複製が成簀堂叢書の一冊として刊行されたのは大正2年(1914)のことである。

#### 4. 考察

本研究は、近世の異類合戦物に特徴的な身近な嗜好品を対象とする作品を取り上げ、1. 『酒煙草合戦』の基礎的研究、2. 餅酒合戦・餅合戦物の系統的研究を、それらの原本の調査を中心に行い、異類合戦物の文芸史における嗜好品の受容実態を把握しようとするものである。以下に紙面の及ぶ範囲で考察を行いたい。

##### 1. 『酒煙草合戦』の基礎的研究

『酒煙草合戦』徳田本及びA本の梗概は次のようにまとめられる(B本については、上記3-1-③備考2参照)。

- 1 五盃後の天目の御宇、酒宴で酒の大將能登守七尾の庄司と煙草の大將九州探題薩摩守国部太郎呑吉の間で酒煙草の優劣・要不要をめぐる論争が起きる。

- 2 その夜、国部は触れを回して軍勢をあつめる。
- 3 一方、煙草方の動きを知った味醂酒は軍勢を集め、先手を打つべく国部の城のある薩摩に軍船を出す。
- 4 煙草方は籠城戦の準備を整える。
- 5 酒方は薩摩に上陸し、国部の城で攻防戦が行われる。この間、国部太郎は櫓の上から煙草の得、酒の損を説き、煙草方の軍勢に檄を飛ばす。
- 6 宇治の初昔権守坪房・美濃の足長出葉の庄司が戦場に駆けつけ、帝の勅諭を伝え、酒と煙草は和睦する。

興味深いのは、餅（菓子）と酒による合戦物が室町時代から明治以降の近代に至るまで文芸伝統として続いていったのに対して、酒と煙草による合戦物は現在この物語しか確認されていないことだ。当該作品以外には論争物である『酒茶多葉粉口論』（たばこと塩の博物館所蔵・写1冊）があるが、これは酒と煙草だけでなく、茶も含まれるので、正確には酒と煙草の論争物ということにはならない。

徳田本の特筆すべき点は、奥書に「安永四年」（1775年）とあることである。B本には奥書がなく、A本には「安政四年」（1857年）とあることから、幕末期の書写になることが分かる。三本ともに本文の異同が大きいのであるが、単純に考えれば、とりあえず徳田本が最古本と見られ、本文的にも原本に近い可能性が高いだろう。

成立事情については今後の課題となるが、A本の解題に当たる『酒煙草合戦』について（無記名）に「仙台浄瑠璃（あるいは奥浄瑠璃、お国浄瑠璃）であるという指摘もある」という記述が見える。誰の指摘であるか明記されていないが、これについて解題者は「仙台というよりも日本海側の地域と深く関係している。そのため、現在のところ、仙台浄瑠璃とは分類しきれていない」と否定的である。

このように、本物語については不明な点が多い。そこに徳田本が出現したことで、改めて考える必要が出てきたわけである。諸本を検討したところ、次のような事実、あるいは可能性が見えてきた。

第一に、『酒煙草合戦』は徳田本及A本から成る甲類と、孤本であるB本の乙類の二つの系統に分けることができる。甲類2種は擬人化された酒や煙草に異同が見られるが、プロットは同一である。それに対してB本はキャラクター名もプロットも異なる。

第二に、甲類の二種の伝本の関係はまだ明確ではない。しかし、A本にあるべき本文が欠落していることや、〈勢揃え〉のパートに伴う軍勢総数の記述が〈勢揃え〉とは別の個所に置かれていることなどから、A本が大幅に加筆修正したのではないかと思われる。ただし、キャラクターの異同がこの解釈を補強するものとは言えず、なお検討を要する。

第三に、乙類は甲類から派生したものではなく、同じコンセプトで新たな創作を試みたものと思われる。乙類の梗概は、上記3-1-③備考2で示した通り、酒と煙草の合戦譚という点では同じだが、両軍勢の序列や仲裁者（甲類が飯であるのに対し、乙類は茶）が異なるなど、大幅な趣向の違いが認められる。

第四に、甲類・乙類ともに越後の在方の酒が擬人化し、また酒造地が登場することが多い点に特色の一つがある。また、煙草は東北、甲信越の産が中心であるが、やはり煙草の産地としては全国的に無名な越後の村名が見られる。一方、越後以外の酒・煙草は主に全国的に知られたもの（伊丹諸白や国分煙草等）、越後に通じる街道筋の産物（会津、米沢、信州産等）である。このことから、本物語は、越後国内の酒・煙草の流通に通じた人物の手になるのではないかと思われる。

B 本の旧蔵者が新発田藩の大庄屋（城下町近郷）であったことを思うと、18世紀後半の、越後国内における物産品の生産や流通に関わった地主層に注目する必要があると考える。

近世中期、各地の名物・物産品が流通するようになる中で、酒や煙草といった嗜好品もまた異類合戦物の中に擬人化キャラクターとして登場するようになった。『酒煙草合戦』はそうした文化的コンテクストを背景に成立した物語と評価できるだろう。

なお、最近見出した「酒煙草論」（蓬左文庫所蔵）は、①～③とは全く異なる環境で成った作品である。詳細の分析はこれからの課題としたい。

## 2. 餅酒合戦・餅合戦物の系統的研究

餅酒合戦については、物産品とその文芸への利用という観点からの研究が行われてきた<sup>8)</sup>。もう一つ、口承文芸研究から、早物語としての研究も行われてきた<sup>9)</sup>。奥浄瑠璃としての早物語について九州の盲僧琵琶の滑稽物としてである。近世の餅酒合戦物の咄本の類については本格的な調査研究が行われていない。諸作品の本文は改題や改作といった直接的な関係があるものもあれば、緩やかな関係性が窺知できる程度のものもある。こうした作品間の関係性を明らかにすることで、民間の語り物文芸との関係もより鮮明になってくるだろう<sup>11)</sup>。

ここでは『〈名物名代〉餅酒騒動はなし』の本文を中心に、簡単に考察を行いたい。

まずは物語の内容を確認する。

- 1 酒の大將劍菱伊丹之助が酒の徳、餅の失を説く。
- 2 これに対して、餅の大將幾代太夫あん吉が餅の徳、酒の失を説いて反論する。
- 3 酒方が軍勢を揃え、一方の餅方も勢揃えする。
- 4 干菓子・水菓子が餅方に加勢し、一方、生肴（魚類）・精進肴が酒方に加勢する。
- 5 戦が始まると、食物の総大將本膳飯の守服吉が仲裁に入り、和睦に及ぶ。

この物語と関連する作品に『太平記餅酒合戦』『餅酒合戦』『膳太平記餅酒嘶』などが挙げられる。『酒餅大合戦』（『大寄噺尻馬』所収）を例に述べると、本作品は初代十返舎一九（天保2年〈1831〉没）の作と考えられる<sup>11)</sup>。人能大しよくいん（大食院）の時代、大酒元年餅の正月の頃、鏡山（武蔵 川越）で池田みきの守諸白と劍菱伊丹之助が餅方を滅ぼして上戸一統支配の世にしようと企てるべく、満願寺入道焼酎軒・白ざさ小西之助・老松山本の判官・白雪かせや哥之助、そのほか、灘・西宮の銘酒の面々と合戦の評議をする。一方、このことを聞き知った餅方は、駿河の安倍川左衛門餅氏を惣大將として先手を取って鏡山を攻めることにする。その後、双方に加勢が入り、乱戦に及ぶが、食物の総大將米の冠者出来吉が仲裁に入り、和睦に至ると

いうものである。『太平記餅酒合戦』（江戸馬喰町 吉田屋小吉版）や『膳太平記餅酒噺』（がらくたうをとりやまうみげこじょうごよみきりおおかっせん 雑具魚鳥山海餅酒読切大合戦』所収）もこれに類する物語内容である。

詳細は本文検証は後考に譲るが、簡単に指摘しておく、『太平記餅酒合戦』と『膳太平記餅酒噺』とは干菓子が餅に加勢する部分がない。この2つは本文も近似しており、『膳太平記餅酒噺』は『太平記餅酒合戦』の改題本と認識しても問題ないと思われる。干菓子の加勢は、水菓子と併せ、酒方の生肴・精進肴の加勢と対称させていると考え、干菓子の加勢の場面をもつ『餅酒騒動はなし』や『餅酒大合戦』のほうが古い本文を持っていると考えられるだろう。

さらに『餅酒騒動はなし』は『滑稽五穀合戦』とも関係している。それは本文が、ということではなく、キャラクターの一部がという意味である。両者は物語のプロットが大きく異なっており、一見すると関連性が見出せない。しかし『餅酒騒動はなし』は『滑稽五穀太平記』とキャラクターの共有という点で関係している（図13）。そして、これと同じことは、別のキャラクター群において、『餅酒大合戦』についても言えることである（図14-15）。

ここからは、擬人化された餅と酒の世界観にキャラクターを共有しながら、個々の作者が新たなストーリーを創作する文化的背景を見て取ることができるだろう。

一般名称	個体名	住所	参考2『滑稽五穀合戦』	参考1『餅酒大合戦』
甘酒	三國一郎甘酒	江戸 門跡前		あつ井源吾あまざけ(「三國一」)
泡盛	薩摩の守泡盛	薩摩国	薩摩守平忠度	
鬼ごろし	鬼ごろしとぶ六兵衛高遠	信濃国高遠		
桑酒	桑酒あられ之介		桑酒霞之助	
剣菱	剣菱伊丹之助諸白	摂津国伊丹	池田伊丹之助剣菱	けんびし伊丹之助
瀧水	四方の赤法師瀧水	江戸 和泉町	四方の蔵人瀧水	
千代倉	千代倉の土兵衛割利	三河国		
七ツ梅	七ツ梅あから之介呑よし	摂津国伊丹		
富士野	富士野の四郎	駿河国		
保命酒	味淋ちの保命坊		味淋寺の保命坊	
満願寺	満願寺の甘口法橋	摂津国伊丹	満願寺の甘口坊	まんぐはん寺の入道
したみ酒	志田見埃右衛門樽底		滴見芥の太夫樽底	
地回り酒	地舞り悪酒郎昔酒		地廻悪酒地兵衛	
新酒	新酒登之介品醒		新酒登之助鉢巻	
縄巻	隅田川樽右衛門縄巻	江戸 浅草並木	山屋樽作縄巻	
瀧水	四方の赤法師瀧水	江戸 和泉町	四方の蔵人瀧水	
素山	素山の古酒郎口	摂津国伊丹	酒器	

図13 酒のキャラクターの比較

一般名称	個体名	住所	参考2『滑稽五穀合戦』	参考1『餅酒大合戦』
青鮫	生貝の治郎青鮫	武蔵	生貝次郎青鮫	生貝の治郎青鮫
鯛	鯛野与市	相模 三浦	浅鯛の与市	鯛の与市
鯨	あじ原平三はせ時			あしわら平三はせ時
虎魚	おこぜの六弥太鱧住	武蔵		おこぜの六弥太たかずみ
鯉	指身の治郎かつ魚	相模		さし身の次郎かつ魚
金頭	士のどふの金頭	武蔵	私の党の火頭魚	士のどの金頭
鎌倉海老	鎌倉海老の権五郎はねまさ	相模 鎌倉	伊勢海老	かまくらゑびの権五郎勿政
鰻	かれいの六郎	紀伊 熊野		鰻の六郎
鱈	鱈羅の十郎	相模	馬鮫魚十郎	さほら十郎
鯛	鯛野三郎	紀伊 熊野	鯛三郎	鯛の三郎
鯛	おたきの鯛蔵ひれあれ	上総	加賀美鯛九郎	明石の鯛蔵ひれあり(摂津)
鰻	鰻の入道骨なし	越後	章魚入道八足齋	たこの入道ほねなし
鯉	平めの武者所	武蔵	平目の武者所	平目の武者所
河豚	ふくの長左衛門毒あり	相模	北向河豚蔵	ふくの長左衛門どくあり
ほうぼう	ほうぼうの四郎高政			ほうぼうの四郎たか政

図14 生肴のキャラクターの比較

一般名称	個体名	住所	参考2『滑稽五穀合戦』	参考1『餅酒大合戦』
瓜	瓜割四郎たね捨		瓜割四郎	瓜わり四郎種捨
瓜	本田瓜治郎近常			本田瓜の次郎ちかつね
柿	甘ほしつるしの丞皮むき			あまほしつるしの丞皮むき
柿	木ざわし柿十郎洗なし			まざはし嘉吉郎しぶなし
柿	樽抜右衛門管柿美		樽抜衛門	樽ぬきゑもんの守かざき
九年母	ざくろ山別堂九年坊のきんかん僧都	石塚・金柑		ざくろ山の別当九年坊のきんかん僧都
西瓜	真夏西瓜の守立うり		西瓜三郎	真夏西瓜の守立売
蜜柑	みかん太夫あつ盛		平敦盛	みかんの太夫あつもり
林檎	りんごの三郎高則		林檎三郎	りんごの三郎高のり

図15 精進肴のキャラクターの比較



## 5. 結論

以上、異類合戦物の文芸史における嗜好品の受容実態を明らかにすべく、考察してきた。具体的には、第一に『酒煙草合戦』の基礎、第二に餅酒合戦物・餅合戦物の系統を検討した。

まず、『酒煙草合戦』の基礎的研究から見えてきたことは、都市と地方の差である。

たとえば『餅酒騒動はなし』は江戸で作られた物語である。本作品に登場する酒の擬人化キャラクターについては図 13 に示したが、そこには各地から江戸に入ってくる名酒の数々が利用されていることが分かる。より顕著なのは餅・菓子の擬人化の場合である（図 16）。

一般名称	個体名	住所	備考
安倍川餅	黄粉五文左衛門水取	駿河 安倍川	
あらうち団子			
有平糖	ある平太貞盛		平貞盛
いくよ餅	いく世大夫あん吉	江戸 両国	幾代太夫
金平糖	猪の俣の金平糖		猪俣小平六範綱
お亀団子		飯倉	女武者
翁煎餅	翁千兵衛くすまき		
雷おこし	おこしの五郎丸		御所五郎丸
お多福餅		江戸 八丁堀	女武者
加賀餅	鈴木一郎加賀餅		
柏餅	さとふ栢の忠信		佐藤忠信
雁金	雁金弥太郎	江戸 深川	
軽焼	軽焼法眼	江戸 浅草誓願寺前	
菊わん			
切餅	目黒の栗守切餅	江戸 目黒	
子育て飴	子育て太郎飴吉	遠江 小夜中山	
塩餅?	日本橋之服太左衛門塩味	江戸 日本橋	
白とり			
助惣焼	麩野焼介	江戸 麩町	
大仏餅	大佛馬頭米吉	江戸 浅草	
達磨糖	だるま糖た秀郷		田原藤太秀郷
壺屋の饅頭	壺屋饅頭兵衛腰高		
鳥飼和泉の羊羹	鳥飼和泉入道ゆふかん	江戸 日本橋	
松風			
最中		江戸 吉原	
米春団子			
米饅頭		鶴見	
落雁			
蕨餅	蕨の粉次郎高賣	遠江 日坂	

図 16 餅・菓子のキャラクター一覧

『餅酒騒動はなし』に登場する餅・菓子のキャラクターはその多くが江戸の中で製造・販売されているものであることが分かる。両国や深川、日本橋といった町の名物として知られ、さらには鳥飼和泉の羊羹や壺屋の饅頭といった店名まで特定して擬人化している。江戸の各町での名物の誕生、名店の評判という背景がそこにはあるだろう。つまり都市社会における酒と餅・菓子の受容と供給の浸透がキャラクターというかたちで作品上に現れているわけである。

これに対して、『酒煙草合戦』で擬人化される酒はどうか（図 17）。

酒名・産地名	擬人名	住所	現在地	備考
	仙台みたちの権太郎坪平	陸奥 仙台	宮城 仙台	
	若松入道円心	奥州 若松	福島 会津若松	
(土用詰)	村上の土用詰 [浄念の甘五郎酒政] [石川の菊丞] 加治の軍治 甘口の四郎	越後 村上 越後 越後 加治 越後 新発田 越後 笹岡 越後 水原	新潟 村上 新潟 村上? 新潟 新発田? 新潟 新発田 新潟 阿賀野 新潟 阿賀野	土用詰は土用酒の意か 水原か 旧北蒲原上石川、下石川村?
(小夏) (諸白) (飛切)	[酒屋小阿加の民部] [新津山崎の入道] [籠島角田川の新吉] [村松精持の小太郎] 甘口粕持の小太郎 小夏の次郎 諸白の三郎 地蔵堂の飛切 加茂五郎 三条五十嵐小源[次]	越後 小阿賀 越後 新津 越後 越後 五泉 越後 五泉 越後 五泉 越後 五泉 越後 地蔵堂 越後 加茂 越後 五十嵐 越後 与板 越後 長岡 越後 関 越後 越後	新潟 江南区 新潟 新潟 新潟 新潟 五泉 新潟 五泉 新潟 五泉 新潟 五泉 新潟 燕 新潟 加茂 新潟 三条 新潟 長岡 新潟 長岡 新潟 新潟	酒屋町 新潟市西蒲区角田山に關係?
七尾酒	能登守七尾庄司	能登 七尾	富山 七尾	B本「七尾の一党」
菊酒	加賀守菊酒与市	加賀	石川 白山	B本「加賀の菊酒」
伊丹諸白	摂津守伊丹諸白前司	摂津 伊丹	兵庫 伊丹	
堺酒	和泉守堺酒	和泉 堺	大阪 堺	堺産の酒の意
堺酒	羽衣入道	和泉 堺	大阪 堺	堺産の酒の意
紹興酒				
忍冬酒	忍冬別当			B本「忍冬三年酒」
葡萄酒				B本「葡萄酒」
保命酒				四天王同伴の一人武者 B本「保命酒」
味醂酒	味醂酒入道浄閑 三がい松[三ヶ松]の判官 つらの赤いが[人] 色が花染右衛門 猿丸太郎うす赤 酒の上の是呑 柿本酒丸 かななべ源五酒綱 酒樽民部公時 臼井の酒水 ト部の末酒 平酒盛 壬生只呑			B本「美林王」 文武五人男 文武五人男 文武五人男 文武五人男 文武五人男 四天王 四天王 四天王 四天王
( )=非酒名	[ ]=A本			

図 17 酒のキャラクター一覧

甲類乙類ともに越後の在方の酒が擬人化し、また酒造地が登場する。特に甲類は、越後以外の酒造地は奥州、北陸のほか、伊丹・堺のみである。七尾酒や加賀の菊酒、伊丹諸白、堺酒は全国的に名の知れた酒であった。他国ではほとんど知られていない越後在方の酒が数多く登場する点に地域性が顕著に表れている。

また、煙草の産地についても詳しい。一覧の掲示と分析は省略するが、煙草についていえば、とりわけ出羽・奥州の東北各地、甲信越の産地が多い。それに対して関西は国分煙草、服部煙草

といった全国的に著名なものと、わずか3つのものしか登場しないのである。つまり越後街道筋の煙草が主であり、全国的に知られた煙草も含まれるということだ。

こうした傾向から、酒にしる煙草にしる、越後国内で流通していたものがキャラクター化されていたことが考えられるだろう。この点、3-2-③で紹介した写本の『酒餅軍記』（津市立図書館所蔵）が小田原から伊勢まで東海地域を中心として酒・菓子・海産物等が擬人化されていること、文化年間に成った『五穀繁昌記（精進魚類問答）』が九州産の海産物や農産物を登場させていることも同じ傾向を見て取ることができる。

このように、地方で作られた異類合戦物には、地域的特色がキャラクターとして造形される。地方における文芸の発展に商品流通と特産品の形成といった地域文化が如実に表れているのが異類合戦物であるということができるとはのではないだろうか。

次に、餅酒合戦物の調査研究から見てきたことは、餅と酒の合戦というコンセプトが、〈世界〉として共有された物語コンテンツとして受け入れられてきたことである。物語の本文が後続作品に影響を与えることは勿論あるが、そればかりではない。餅と酒が擬人化した世界観を前提とし、擬人化キャラクターたちが共有され、ストーリーが創り出される。あるいはその逆に、餅酒合戦の擬人化世界とストーリーの大枠を共有しながら、キャラクターを別の餅や酒に設定する。このような、歌舞伎でいうところの〈世界〉とそれを踏まえた趣向が生み出されてきた流れを見て取ることができるだろうと思われる。図18で示した諸作品は〈世界〉を共有しながら結果として我々の眼前に現れた作品の一端として捉えられるのではないかと。

都市の各町の名物の出現、地方の特産品形成が異類合戦物のキャラクターとしての利用に反映されていく。そして酒・餅（菓子）・煙草というそれぞれのカテゴリーの中で、特徴を生かした位置付けやキャラクタイズが行われている。擬人化キャラクターとして表象化された嗜好品は、その当時のそれぞれの嗜好品に対する消費者のイメージが表れていると言えるだろう。

	食品		嗜好品		
	草木	魚介	餅・菓子	酒茶	煙草
近世以前 (15-16c)	写本『精進魚類物語』				
	狂言「菓争」				
	能「花軍」				
	写本『六条葵上物語』				
17c前期 (1601-1630)					
17c中後期 (1631-1700)	写本『月林草』	絵入版本『魚太平記』		写本『酒茶論』	
	版本『精進魚類物語』				
	赤本『うおがせん并しやうじんもの』				
	絵入版本『草木太平記』				
	写本『合戦巻』				
18c前期 (1701-1730)	絵入版本『草木軍談賤爪木』		歌謡「菓子軍」	戯文「酒煙草論」	
18c中期 (1731-1780)	赤本『福徳大根合戦』	赤本『逸名鱗合戦』	写本『酒餅軍記』		
			黒本『酒餅和合無間鐘』		
			黄表紙『薬物見立御世話』		
		赤本『魚鳥合戦』	黄表紙『餅酒腹中能同志』		
	黄表紙『腹京師食物合戦』				
18c後期 (1781-1800)	写本『魚類精進合戦』			写本『酒煙草合戦』A本・B本	
19c前期 (1801-1830)	黄表紙『茶漬原御膳合戦』	俗謡「さかな浄瑠璃」	写本『名物名代 餅酒騒動はなし』		
	黄表紙『食類合戦和陸香之物』	断本『魚貝英記餅酒合戦』	断本『太平記餅酒合戦』		
	写本『五穀繁昌記』	断本『魚貝平記鳥獸断』	断本『餅酒大合戦』		
	断本『飯太平記大合戦』				
19c中期 (1831-1868)	写本『魚類青物合戦状』		滑稽本『滑稽五穀太平記』		
	断本『さかなあを物大合戦』		断本『餅酒後日太平記』		
		断本『魚貝平記獸語』	写本『餅酒論笑太平記』		
			錦絵「太平喜餅酒多々買」		
			錦絵「餅酒二偏嘉世意の多々買」		
			写本『餅合戦状』		
			写本『餅酒合戦』(語り物)		
	断本『雑具魚鳥山海餅酒読切大合戦』『読切大合戦』				
明治以降	錦絵「龍宮魚勝戦」		語り物「餅酒合戦」		
	錦絵「芋だこ合戦のつ」		語り物「餅合戦」		
	錦絵「山畑道化合戦之図」		南部神楽狂言「餅合戦」		
	語り物「芋浄瑠璃」	阿呆陀羅經「魚尽し」	戯文「風流餅酒論」		
			複製『餅酒論』		

図 18 食品及び嗜好品に関する異類合戦物略年表

## 6. 引用文献

- 1) 伊藤慎吾「異類合戦物の表現」『擬人化と異類合戦の文芸史』三弥井書店、2017年、136-159
- 2) 伊藤慎吾「異類合戦物の展開」上掲1書、167-179
- 3) 伊藤慎吾「異類合戦物一覧」上掲1書、283-287
- 4) 畑有紀「「酒餅論」と江戸中後期の物産—江戸への下り酒をめぐって—」(『論集: 日韓学術交流会』1、2014年)、「江戸後期「酒餅論」作品とその社会」(『軍記と語り物』53、201年)、「黄表紙に擬人化される酒」(『酔いの文化史 (アジア遊学 250)』勉誠出版、2020年)、「黄表紙に見る酒の擬人化: 飲食物の文芸表現における酒の位置付け」(『酒史研究』37、2022年)等。
- 5) Follador, Elena. "Re-contextualizing *Shōjin gyorui monogatari*, or When the Fish Declared War on the Greens" JAPAN REVIEW: Journal of the International Research Center for Japanese Studies 35(2021), 31-58
- 6) 石井正巳「早物語「餅合戦」の伝承」『学芸国語国文学』20、1985年、73-87
- 7) 石井正巳『『万狂言本』の翻刻』『日本私学教育研究所 調査資料』166、1992年、61-76
- 8) 古川瑞昌『餅博物誌』(東京書房、1982年)、赤井達郎『菓子の文化誌』河原書店、2005年)、前掲4畑論文等。



- 9) 安間清『早物語覚え書』(甲陽書房、1964年)、前掲6石井論文、武田正『天保元年やかんの年 早物語の民俗学』(岩田書院、2005年)等。
- 10) 民間の語り物文芸としての特色については伊藤慎吾「語り物文芸の異類合戦物について―「餅酒合戦」を例として」(『口承文藝研究』42、2019年)で論じた。近世文芸としての餅酒合戦との関係性については今後の課題とする。
- 11) 岡雅彦「解説」『近世咄本集』(三弥井書店、1988年)、21ページ。

【付記】貴重な資料の調査及び画像掲載をご許可下さった所蔵者・所蔵機関の皆様、本報告に関わるご意見・ご教示を下さった皆様にお礼申し上げます。

## 7. 英文アブストラクト

Acceptance of Luxury Goods in a Genre of Battle Stories with Non-Human Characters from the Early Modern Period to the Early Modern Period

Shingo ITO (Kokugakuin Tochigi Junior College)

Textual analysis is essential to clarify the reception of luxury goods in A genre of battle stories with non-human characters. Since there are many materials that have not been investigated or reprinted, it is necessary to investigate the original manuscript first. Therefore, this research is divided into two parts. One is the study of the texts of "*Sake and Tobacco Kassen (The battle of liquors and cigarettes)*", and the other is the study of the genealogy of the battle of rice cakes and liquors.

1) Investigation of various texts on "*Sake and Tobacco Kassen (The battle of liquors and cigarettes)*"

2) Investigation of texts on the battle of rice cakes and liquors or the battle of cakes

Most of the manuscripts of the battle of rice cakes and liquors or the battle of cakes have not been investigated. Therefore, I conducted a survey of the six works and collected related materials.

The emergence of specialties in each city town and the formation of regional specialty products are reflected in the use of different anthropomorphic characters. And within each category of liquors, rice cakes (and sweets), and cigarettes, positioning and characterization that make the most of their characteristics are being carried out. It can be said that luxury goods symbolized as anthropomorphic characters represent the consumer's image of each goods at that time.